

天文と俳句

寺田寅彦

(国立天文台)

俳句季題の分類は普通に時候、天文、地理、人事、動物、植物といふ風になつて居る。此等のうちで後の三つは別として、初めの三つの項目中に於ける各季題の分け方は現代の科学知識から見ると、決して合理的であるとは思はれない [1]。

今日の天文学 (アストロノミー) は天體、即、星の學問であつて氣象學 (メテオロヂー) とは全然其分野を異にして居るにも拘らず、相當な教養ある人でさへ天文臺と氣象臺との區別の分らないことが屢々ある。此れは俳諧に於てのみならず昔から支那日本で所謂天文と稱したものが、昔のギリシャで「メテオロス」と云つたものと同様「天と地との間に於けるあらゆる現象」といふ意味に相應して居たから、其因習がどうしても抜け切らないせゐであらう。それでかういふ混雜の起るやうになつた事の起りの責任は、或は寧ろ天文といふ文字を星學の方へ持つていつた人にあるかも知れない。

其れは兎に角、俳句季題の中で今日の意味での天文に關するものは月とか星月夜とか銀河とかいふ種類のもものが極めて少數にあるだけで、他の大部分は殆ど皆今日の所謂氣象學的現象に關するものばかりである。

さうかと思ふと又季題で「時候」の部にはいつて居る立春とか夏至とかいふのは解釋のしやうによつては星學上の季節であり、又考へ方によつては氣象學上の意味をも含んで居る。又一方で餘寒とか肌寒とか、涼しとか暑しとかいふのは當然氣象學上の事柄である。

又一方では通例「地理」の部にはいつて居るものゝうちでも雪解とか、水温むとか、凍てるとか、水涸るとかいは當然氣象であり、汐干や初汐などは考へ方によつては寧ろ天文だとも云はゞ云はれなくはない。

併しかういふ季題分類法に關する問題は、此講座では自分の受持以外の事であるから、此處で詳論するつもりはない。唯此の一篇の主題としての「天文」を、從來の分類による天文だけに限らず、時候及地理の一部分も引くるめた、メテオロスの意味に解釋することにしたいと思ふのである。

季節の感じは俳句の生命であり第一要素である。此れを除去したものは最早俳句ではなくて、それは川柳であるか一種のエピグラムに過ぎない。俳句の内容としての具體的な世界像の構成に要する「時」の要素を決定するものが、此の季題に含まれた時期の指定である。時に無關係な「不易」な眞の宣明のみでは決して俳諧になり得ないのである。「流行」する時の流の中の一つの點を確實に把握して

指示しなければ具象的な映像は現はれ得ないのである。

時に對立する空間的要素が、少くも表面上、何處にも指定されて居ないやうな俳句は可能である。例へば「時鳥ほととぎす」と明けにけり」といふやうなものでも矢張發句であり得るのである。勿論此れとても句の裏面には殘燈の下に枕を敷てゐる作者の居室の光景の潜在像は現在して居て、それがなければ此等の句は全然無意味な謔語に過ぎないのであらう。(以下略)

$$F(\lambda) = \varepsilon_{cont} \left(\frac{\lambda}{10\mu m} \right)^{-1.6} B(T_{cont}, \lambda) \times e^{-\tau_{9.7} \times k(\lambda)} \quad (1)$$

などなど、文章、式、画像、参考文献の例です。和文の本文中の句読点は「。」、「、」を用いてください。キャプションの中だけ「。」と「、」です (図 1)。

図や表は本文中で必ず参照し、上記の例のように「(図 1)」等と文中もしくは文末に挿入してください。参考文献がある場合も必ず本文中で参照してください。上記の文章は寺田寅彦の『天文と俳句』を青空文庫より転載しました [2]。

1 ページで収まるように分量を調節してください。

その他の細かなきまりについては、
<http://library.nao.ac.jp/syuppan/nenji/highlight.html>
を参照してください。

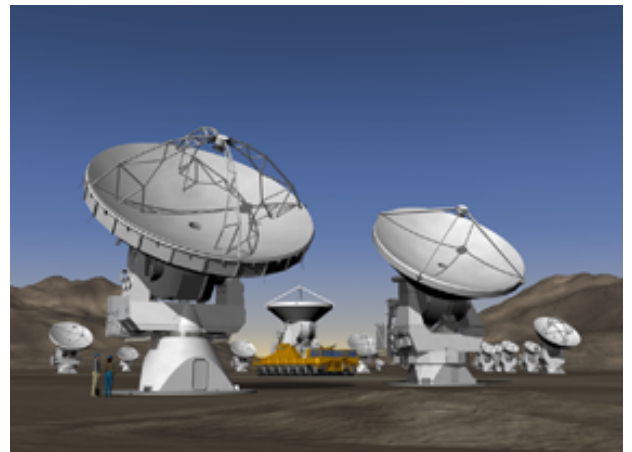


図 1: 図のキャプション中では「。」と「、」を用いること、和文の場合は全角文字、欧文の場合は半角文字で、

参考文献

[1] Smith, B. A., Terrile, R. J.: 1984, *Science*, **226**, 1421.

[2] 寺田寅彦: 1948, 青空文庫.